

カウンセリング・スキルを考慮した 授業づくりに関する実証的研究

— コミュニティ心理学的視座からのアプローチ —

千 原 ・ 美 重 子*

Empirical Study on Teaching Skill with Counseling Techniques:
A Clinical and Community Psychological Approach

Mieko Chihara

要 旨

本研究は、カウンセリング・スキルを生かした授業をすることによって生徒の授業に対する評価が上がるかどうか、また、教師の授業度が向上するかどうかを実証授業を行って検証することを目的としている。同時に、臨床心理士が学校という現場に入り協働するというコミュニティ心理学の立場が有効かどうかを検討することである。その結果、実証授業後に生徒の授業に対する評価は上がり、教師の授業度も向上したことを示した。学校コミュニティへの臨床心理士の参画の意義を検討した。今後コミュニティ心理学が果たす役割が大きいことを示唆するものであった。

問題と目的

学力低下の問題が指摘されて久しい。本当に子どもたちは学ぶことが嫌いなのだろうか。

また、学習への動機づけが充分でない生徒が多いとの指摘もあり、学校教育での教科指導が困難である状況は一般的な傾向である。臨床心理士として、生徒の相談事例に接するたびに、学習が楽しい、よく分かるようになれば、学校での居場所が作れるのではないかとかねがね思っていた。

平成18年度に、中学校の先生と、「学校教育相談に関する研究」のプロジェクトチームを組む機会をいただいた。

過去5年間、アサーション・トレーニング、ピア・サポート、ストレスマネジメントの研究を現場の教員とチームを組み、専門研究員として実際に教育現場に向向って研究をしてきた。「学校教育相談に関する研究」は、テーマがカウンセリング・スキルを生かした授業づくりであり、非常に関心のある分野に参加することができた。昨年度の中間報告(千原、2007)では、カウンセリングの講義後のシャトルカードの反応について分析した結果、教師の感想において非常

平成19年9月28日受理 *社会学研究科

にポジティブな結果を得た。今回は、全体のプロジェクトの結果を分析した結果、どのような展望が見えてくるのかを考察したい。

今回の研究の視座として、コミュニティ心理学的観点あげている。これは平成7(1995)年度以降において、臨床心理士が相談室から地域住民の生活の場に飛び込むという心理臨床的地域支援が急激に求められるようになってきとことによる。

平成7年はコミュニティ心理学にとって画期的な年であった。1月17日に阪神・淡路大震災が発生し、被災者の心のケアのためには、密室で来談者を待つという姿勢ではなく、被災者の生活の場に向き、心理臨床的地域援助の実践が求められることになった。

さらに、平成7年4月から各都道府県の小中高にスクールカウンセラーとして、臨床心理士など心理臨床の高度の専門家を試行的に学校現場に配置する国家的プロジェクトが開始されたのである。学校教育へのパラダイムの変換が求められた結果である。

日本臨床心理士認定協会では、臨床心理士の実践的役割として、臨床心理学的査定と、心理相談、心理臨床的地域援助をあげている。今後ますます地域援助の要請が求められてきだろう。特に、緊急支援対応は非常に増えており、多くの臨床心理士が緊急に現場に介入しており、地域援助の成果が高まっている。

平成19年度は、異なった観点からであるが、「人権に関する研究」に再度専門研究員としてコミュニティ心理学の視座から研究に参画をしているところである。結果については、次回発表したい。

今回の研究目的は、地域支援として学校現場での授業にカウンセリング・スキルを導入することにより、生徒の授業理解や学習への動機づけがどのように変化するか、また、教師の授業がどのように変化するかを見ることである。

カウンセリング・マインドという言葉が教育現場で使用され始めたのは、1970年ごろからである。カウンセリング・マインドという言葉は、和製英語であり、その意味は、カウンセリングを行うときのような対等で信頼関係に裏打ちされたような人間関係のありようをさす言葉である。

今回は、カウンセリング・マインドよりやや踏み込んで、カウンセリング・スキルを考慮した授業づくりの研究である。教師が授業でカウンセラーになれというのではない。カウンセリングのスキルを考慮して、授業をするということである。

研究仮説として、「カウンセリング・スキルを授業に生かすことで、生徒が授業への主体的な参画を深め、学習への動機づけや理解度が高まり、生徒の教師への評価が高まり、教師の授業度が向上する」ということである。

したがって、今回の論文の具体的な目的は、

- (1) 授業に対する生徒の評価が、カウンセリング・スキルを導入した授業後に高まるか、
- (2) 教師の授業度が、実証授業後に高まる傾向にあるか、
- (3) コミュニティ心理学的視座の実証

ということを検討することである。

研究方法

1. 研究期間：平成18年4月から平成19年3月まで
2. 研究委員：プロジェクト推進研究員1名、専門研究員2名（筆者も含む）、研究委員4名（2名の実証授業者を含む）、計7人
3. 研究対象者：中学生 X中学校1年生17人（英語科目）、Y中学校1年生24人（国語科）、計41人。教師（実証授業実施者） X中学校英語科担当A先生（男性）、Y中学校国語科担当B先生（女性）、計2名
4. 手続き：
 - (1) 実証授業に入る前に、生徒に対して授業に対するアンケート調査を実施する。また、授業風景をビデオに撮影し、授業度を測定する。
 - (2) 授業に生かすカウンセリングについて講義をする。講義内容に関しては、5. で説明する。実施者は臨床心理士である。
 - (4) 実証授業に入る前に、毎回指導案を作成し、1次の支援と2次の支援のポイントについて委員会で検討し、修正する。
 - (5) 実証授業は、英語科と国語科目をそれぞれ4回～5回する。毎回授業をビデオに収録する。最終授業のビデオより、授業度を測定する。授業度の分析の観点は、図1に示す。
 - (6) 毎回生徒は、振り返りシートを記入する。

授業者	○ ○		教論	分析者		△ △		2006年7月6日（木） 5校時																										
形態	一斉学習・グループ学習・個別学習														教科		国語																	
言語的コミュニケーション										非言語的コミュニケーション																								
(I) 授業に必要な応答					(II) カウンセリング・スキルを生かした応答					(III) 非カウンセリング的応答				(IV) カウンセリング的なコミュニケーション				(V) 非カウンセリング的なコミュニケーション				(VI) 授業に必要な												
質	指	説	評	誘	範	そ	繰	明	支	質	自	受	評	そ	叱	非	皮	そ	微	姿	近	身	前	首	机	首	腕	後	身	視	表	板	そ	
問	示	明	価	導	読	他	の	返	し	換	え	持	問	示	容	価	他	の	笑	徒	動	大	勢	傾	背	指	導	振	勢	勢	小	外	し	の
回数	22	17	14	0	3	0	10	8	3	11	4	0	4	4	1	0	0	0	0	5	4	0	2	0	6	3	0	0	0	0	0	0	10	0
小計	66						35						0				20				0				10									
計	101										30												131											

図1 分析集計表（例）

5. 授業に生かすカウンセリングの講義内容

- (1) 授業に生かせるカウンセリングについては、教育心理学、臨床心理学、教育相談などの教科で今まで講義してきた講義概要や、新任教師や10年研修などで教育相談に関して講演や演習でしてきた内容を中心にして、パワーポイントで提示し、シャトルカードを用いてその効果を吟味した。
- (2) パワーポイントの具体的な内容は、講義・演習の目的、ウォーミングアップ、プログラムの日程説明をし、その後は第3部に分けて行っている。
- (3) 第1部では、授業とは、カウンセリングとは、授業にカウンセリングを生かす方法、構成的グループ・エンカウンター (SGE)、SGEの演習の実施を含む。SGEの実習内容は、ウォーミングアップ (ごちゃ混ぜビンゴの実施) の後、「授業が面白くない」という生徒の話を書くという教師同士のロールプレイングを行い、シェアリングを行った。
- (4) 第2部では、さまざまなカウンセリング理論について要点をまとめて説明した後、17年にわたる実証的研究の結果について説明した。
- (5) 第3部では、カウンセリングのスキルを授業に生かすための観点を取り上げた。基本的なものとしては、5つの言語スキル (受容、繰り返し、明確化、質問、支持)、8つの非言語スキル (視線、表情、ジェスチャー、声の質・量、席のとり方、言葉遣い、服装・身だしなみ、身体接触) について指摘した。上級者向けとして、1960年代から提唱されたアイビー (2000) のマイクロカウンセリングについて、かわり技法と、積極技法に関して説明した。沈黙、受容、質問、繰り返し、明確化、要約、支持、対決など具体的な言葉の説明をした。

結果と考察

1. 振り返りシートの分析

図2のような5件法による振り返りシートを使用した。5が最高得点である。

(1) 総合的な分析

表1、表2はそれぞれの先生に対する生徒の振り返りシートの得点である。図3は、初回の振り返りシートの「授業について」、「自分自身の評価」、「先生に対する評価」を総合した平均得点と、最終回 (図では第2回) の得点を図示したものである。これによると、最終回の評価が高くなっており、従業への評価が高くなっていることがうかがえる。

(2) 授業に関する評価の分析

振り返りシートの中でも特に授業についての評価について検討する。実証事業に取り組む前と実証事業後と比較すると、「授業は楽しかったですか」の項目では、5の評価が2倍以上増えており、1の評価がなくなっている。また、「授業が良くわかりましたか」の項目では、5の評価が3倍以上増えて、2と1の評価がなくなっている (図4、図5)。

授業振り返りシート

※「5」が一番良い評価です

1年 組 番 氏名

【授業について】

1. 授業は、楽しかったですか。 (5・4・3・2・1)

2. 授業は、よくわかりましたか。 (5・4・3・2・1)

【自分自身の評価】

1. 進んで発表することができた。 (5・4・3・2・1)

2. 話をしっかりと聞くことができた。 (5・4・3・2・1)

3. 授業に意欲的に取り組むことができた。 (5・4・3・2・1)

【先生に対する評価】

1. 表情・身振り・手振りを上手に使い、うまく説明や質問をしている。 (5・4・3・2・1)

2. 生徒の発表をしっかりと受け止めてくれている。 (5・4・3・2・1)

3. わかりやすい授業をしようと努力している。 (5・4・3・2・1)

【今日の授業の感想】

図2 振り返りシート

表1 振り返りシートの結果 (A先生)

	授業		自分自身			先生		
	1	2	1	2	3	1	2	3
9月13日	3.8	3.8	2.3	3.8	3.3	3.1	3.8	3.9
10月3日	4.3	4.1	3.1	4.3	4.3	4.1	4.2	4.3
10月4日	4.2	4.1	3.6	4.1	4.1	4.1	4.2	4.3
10月6日	4.2	4.3	3.3	3.9	3.8	4.0	4.1	4.1
10月17日	4.5	4.4	3.9	4.5	4.6	4.4	4.3	4.5

表2 振り返りシートの結果 (B先生)

	授業		自分自身			先生		
	1	2	1	2	3	1	2	3
7月4日	3.8	3.5	1.8	3.7	3.7	4.0	2.7	4.0
9月22日	3.8	4.4	2.5	3.9	3.6	3.7	3.9	4.4
10月3日	3.3	3.6	2.2	3.5	3.3	3.2	3.7	4.0
10月4日	4.0	3.9	2.5	4.0	3.7	4.4	4.2	4.3

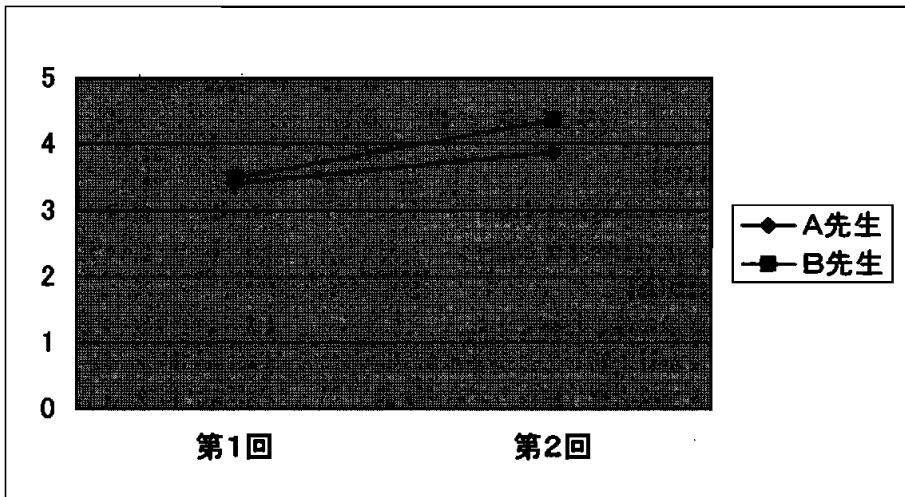


図3 授業についての生徒の評価

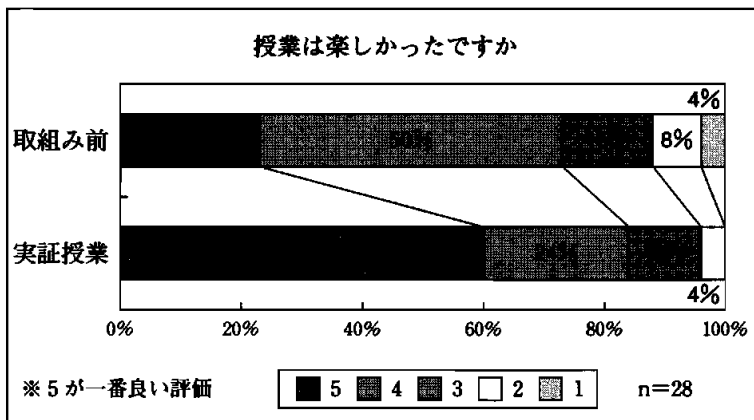


図4 振り返りシートの比較 (楽しい)

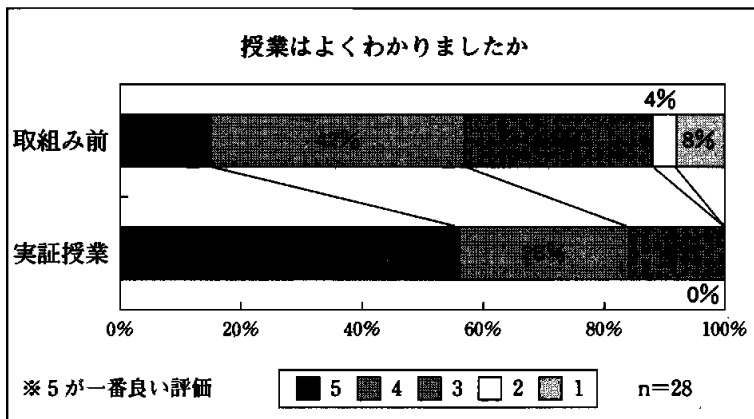


図5 振り返りシートの比較 (わかる)

2. 教師の授業度について

(1) 授業度の指標

教師のカウンセリング・スキルを生かした授業度として、(カウンセリング・スキルを生かした応答+カウンセリング的コミュニケーション) ÷ コミュニケーションの総量×100で算出した(図6)。A先生は、事前では21.6%が、授業後は32.4%、B先生は、事前では42.0%、授業後は48.6%と変化した。それを図示したのが図7である。両先生とも実習授業後に高くなっている。まだ、2事例なので、統計的有意差検定はできないが、かなり上がっていることが示されている。今後、事例数を増やして検討する必要がある。

$$\text{カウンセリング・スキルを生かした授業度} = \frac{\text{カウンセリング・スキルを生かした応答+カウンセリング的コミュニケーション}}{\text{コミュニケーションの総数}} \times 100$$

図6 カウンセリング・スキルを生かした授業度の求め方

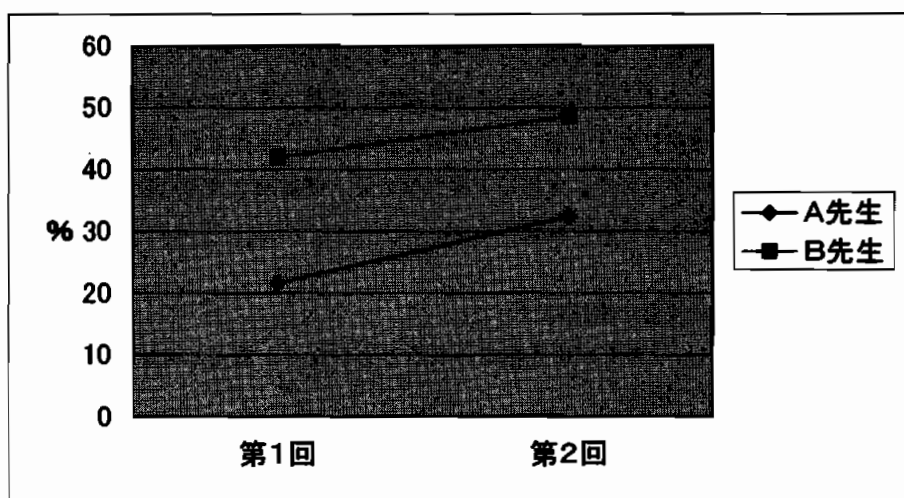


図7 カウンセリング・スキルを生かした授業度

(2) 授業度を示す簡便な指標の考案について

今回の分析では全コミュニケーション量を算出したが、さらに簡便にするためには、カウンセリング・スキルを生かした言語的コミュニケーションを使用した応答(繰り返し、明確化、支持、質問、自己開示、受容、評価)、非言語的カウンセリング的コミュニケーション(微笑み、視線、近接行動、身振り大、前傾姿勢、首肯き、机間指導)に注目することでよいのではないかと考えられる。その上で、その対極にある非カウンセリング的言語応答(叱責、非難、皮肉)、非カウンセリング的非言語コミュニケーション(首横振り、腕組後傾、後傾姿勢、身振り小、視線合わせず、表情乏しい)を見ていく必要があると考える。簡便で利用価値が上がる指標を検討する必要があると思われる。

3. カウンセリング・スキルを生かした授業と授業度の高まりの関連性

授業とは、教育者と被教育者が教材を仲立にして行う営みであるといわれる。したがって、教材研究が十分になされることは必要条件である。それだけで十分かということ、教育者と被教育者との関係性が深まらないと授業の深まりは乏しいものになる。両者の関係をどのようにすれば授業という土台に乗せられるかが、非常に重要である。

今回の研究では、指導案を作成するときに、1次的支援と2次的支援を考慮に入れている。誰にでも共通する支援を1次的支援とした。振り返りシートなどを活用して、生徒の状況やニーズに合わせて個別な支援が必要な生徒に対して、2次的支援を考慮した。結果的に、仮説が支持されたのは、個人が大切にされている授業の雰囲気は、安心感のある状況を醸成したことが1つの要因だと思われる。

今回の授業分析の対象者は、中学1年の国語と英語の教師と、中学1年生である。中学1年生で、英語の授業につまずいて興味を失う生徒がある。また、日常的に使用している国語ではあるが、読み書きにだるさを感じる生徒もあり、結果的に、学校教育(学習)への意欲を失う生徒が多い。

教師が生徒の気持ちを理解し、話を聞こうとするカウンセリング、マインドや、構成的グループエンカウンター(SGE)のように、生徒同士が主体的に活動できるカウンセリング・スキルを用いた授業では、生徒の授業に対する関心度や理解力が高まり、教師自身も授業度を高めることができることを示す傾向が示された。今回は2事例なので、統計的な有意差検討ができなかったが、今後事例を増し、検討することが必要である。

4. コミュニティ心理学的視座の検証について

コミュニティ心理学とは、「誰もが切り捨てられることがなく、個人と環境との適合性を最大にすることである」(山本, 1998)。

学校現場では、不登校、いじめ、友人関係のトラブル、学業不振、問題行動、リストカットなどの自傷行為、教師の精神的・身体的不適応問題など、さまざまな問題がある。こうした問題を解決しながら、生徒も、教師も発達しているともいえる。

今回は、「学校教育相談の研究—カウンセリング・スキルを生かした授業づくり—」というテーマで、中学校で実証的研究を行った。学校というコミュニティに入り、現場の先生と協働して、教育相談と授業との関連性について研究することがどのような結果をもたらすのか、興味を持って参画した。その結果、生徒は学習が楽しく、授業が良くわかるという結果となり、教師も授業度が上がった。学校コミュニティへの臨床心理学の参画は今後さまざまな課題に関して、その必要性、可能性が示唆される結果となった。

参考文献

- 園分康孝・大友秀人 2001『授業に生かすカウンセリング』誠信書房
大林裕季 2007『学校教育相談に関する研究Ⅰ カウンセリング・スキルを生かした授業作り—教師の効果

的なかかわりが授業力を高めるー」平成18年度滋賀県総合教育センター

滝口俊子 2005『スクールカウンセリング』放送大学教育振興会

千原美重子 2007「教育臨床心理学へのアプローチーカウンセリング・スキルを考慮した授業づくりにおける臨床心理士の関与のあり方ー」奈良大学大学院年報 31-30

松原達哉 1998『カウンセリングを生かした授業作り』学事出版

斉藤優他編 2004『授業の技』教育開発研究所

〈付記〉今回の研究にあたり、滋賀県総合教育センター研究員、大林裕季先生を始め、専門委員、研究委員、研究協力校の生徒の皆様には大変協力いただきました。記して感謝申し上げます。

Summary

Purposes of this paper are to study whether students' evaluation of classes become to higher and whether teachers' teaching skills go well, through some experimental classes applied by teaching skills with counseling techniques. It also included to consider usefulness of clinical and community psychology by collaborative activities of certificated clinical psychologists in schools. Results of discussion suggested for the experimental classes to rise the students' evaluation higher and to improvement teachers' teaching skills. These reveal that clinical and community psychology will be important in future.

